

Co-jin Collection - コジコレ - No.8「表現のてざわり」出品作品リスト

作家名	作品タイトル	制作年	素材・技法	サイズ (mm)
牧敦子	1 ぬいぬい	2018	布、糸、木枠	352×525×21
MAKI Atsuko	2 ミシンだいじょうぶ?	不明	布、糸、木枠	555×375×37
	3 タイトル未定	不明	布、糸	325×320
	4 ぬいぬいトートバッグ	不明	布、糸	500×510 (持ち手部分除く)
	5 タイトル未定	不明	布、糸	585×930
	6 タイトル未定	不明	布、糸	370×280
	7 タイトル未定	不明	布、糸	453×685
	8 タイトル未定	不明	布、糸	315×295
	9 タイトル未定	不明	布、糸	490×875
	10 タイトル未定	不明	布、糸	280×450
	11 タイトル未定	不明	布、糸	173×248
	12 見て!!見て!!	不明	布、糸、木枠	370×508×17
	13 “ミシン”がいっぱい～	不明	布、糸、木枠	901×872×17
	14 ミシンしてもいいかな?	不明	布、糸	630×890
	15 タイトル未定	不明	布、糸	200×370
	16 タイトル未定	不明	布、糸	365×215
	17 タイトル未定	不明	布、糸	245×235
	18 タイトル未定	不明	布、糸	250×720
	19 牧敦子 資料映像	2024	3分05秒 (制作: art space co-jin)	-
	高西勇	20 無題	2019	色鉛筆、紙、接着テープ、英字新聞
TAKANISHI Isamu	21 無題	2024	糸、接着剤、紙	175×247
	22 オシドリ	2019	色鉛筆、紙	210×297
	23 無題	2019	色鉛筆、紙	297×210
	24 無題	2023	糸、接着剤、紙	210×295
	25 思いの向くままに	2023	糸、接着剤、紙	210×295
	26 無題	2024	陶土	90×140×155
	27 無題	2024	陶土	150×150×130
	28 高西勇 資料映像	2024	2分47秒 (制作: art space co-jin)	-
	郡山広明	29 瓦礫の跡	2023	ボールペン、水彩、紙
KORIYAMA Hiroaki	30 無題	2022	水彩、紙	398×543
	31 無題	2022	鉛筆、パステル、水彩、紙	392×540
	32 無題	2022	水彩、紙	390×533
	33 無題	2022	水彩、紙	390×540
	34 無題	2022	水彩、紙	390×533
	35 無題	2022	水彩、紙	390×540
	36 無題	2024	色鉛筆、紙	245×352
	37 無題	2023	鉛筆、紙	239×335
	38 スケッチブック	2023	色鉛筆、水彩、紙	350×250
	39 スケッチブック	2024	色鉛筆、紙	350×250
	40 郡山広明 資料映像	2024	2分41秒 (制作: art space co-jin)	-

Co-jin Collection
- コジコレ - No.8

表現の
てざわり
2024 10.16 (水)
12.22 (日)

主催: きょうと障害者文化芸術推進機構

協力: 就労支援施設ヴィレッジれん、社会福祉法人共生福祉会 たなべ緑の風作業所、乙訓福祉施設事務組合 乙訓若竹苑

高西 勇

TAKANISHI Isamu

1970 年生まれ、京田辺市在住

所属 たなべ緑の風作業所

Co-jin Collection - コジコレ -No.8

表現のてざわり

art space co-jin では、この度「Co-jin Collection - コジコレ -No.8 表現のてざわり」を開催いたします。「Co-jin Collection- コジコレ -」とは、前年度の公募展「京都とっておきの芸術祭」の出品者のうち、co-jin スタッフが気になる表現を取り上げてご紹介する企画展です。今回は「表現のてざわり」をテーマに 3 名の方の作品をご紹介します。

靴下の端切れから糸を引き抜く、止まることなく鉛筆で線を引く、思いのままミシンで縫いつづける……言葉を聞いただけで、その作業に伴う感覚を思い起こすことができます。しかし、その「感覚」を他の人と共有することは難しいはずです。なぜなら、その感覚を共有しようとするとき、多くの場合、言葉に置き換えてしまうからです。言葉は便利ですが、実際はその単語それぞれに対して抱く感覚が、お互いに一致しているが確かめようがありません。赤色の赤らしさを説明する時に、薔薇の花びらや夕日を例えても、本当に同じものを思い浮かべているのかは分かりません。言葉によるコミュニケーションは万能のようですが、多くの要素を取りこぼしているように思われます。みなさんも誰かと話をしている、伝わらないもどかしさを感じたことが一度はあるのではないのでしょうか。

一方、言葉に頼らない表現活動では、その動作に伴った感覚が、作品の中に瑞々しく留められています。本展ではこのように表現に込められた感覚を「てざわり」と呼びました。作者がどんな感覚で糸をほぐしたのか、鉛筆を走らせたり、ミシンの操作をしたのか… 3 名の表現はどうやって作られるのか、その動作の中でどんな感覚が生まれたのか。それらを言葉に置き換えることなく、作品から直接感じてみてください。

本展では鑑賞の補助として、体験コーナーも設けました。実際に作者の動きを真似てみたり、作品に触れることで、さらに作者の世界に近づくことができるでしょう。もちろん、作者と全く同じ感覚が得られるものではないはずですが。どれほど近づいても交わることはない。それは悲しむべき溝ではなく、「てざわり」を感じるための余白と捉えてみるのはどうでしょうか。鑑賞された方、一人ひとりが作品を通して作者に向かい合う時間になりますと幸いです。

最後になりましたが、貴重な作品をご出品くださいました作家の皆様、本展の実現のために貴重なご協力を賜りましたすべての皆様に、心からお礼申し上げます。

2024 年 10 月

art space co-jin きょうと障害者文化芸術推進機構

企画展担当 川上桂

輪っか状になった靴下の端切れの山から、使う色と数だけ集めると、ハサミを使って 1cm に満たない小片になるように切る。それをさらに細かく切り、指先でほぐせば、柔らかな短い糸になる。数日をかけて全てをほぐし終わると、水で薄めた接着剤を筆で白紙に塗る。ちょんちょんという擬音が似合いそうな、小さな範囲だ。そこにほぐした糸を指先で貼り付ける。その作業を繰り返す制作は、1 年にわたることもある。高西さんに発話は少なく、本人が作品について語ることも稀だ。高西さんが利用するたなべ緑の風作業所の職員である神村さんに尋ねたところ、作品にはその時の気持ちが反映されているのではないかと教えてくれた。

靴下の端切れを使った作品の公募展へ応募するために始めた貼り絵だが、現在は出品のため以外にも制作を続けている。作業所の仕事でも扱っていたので、慣れ親しんだ素材だったのだろう。端切れの貼り絵以前は、紙を使った貼り絵を制作していた。紙を細かく切り、やはり長い時間をかけて制作していたようだが、作品の所在がわからず今回は拝見することができなかった。塗り絵も紙の貼り絵と同じ時期に作られていたようだが、輪郭線にとられない配色が、端切れの貼り絵の有機的な色面と近いものを感じる。

端切れの貼り絵は作業所の中で制作されている。作業所でやることは本人が選ぶが、それを好んでやっているかは別の問題だと神村さんは言う。「目の前にそれがあるからやっているのかも」。本人の気持ちは謎のままだが、貼り絵をする高西さんの手は止まらない。根を詰めて疲れが出ないよう、職員が声をかけて別の作業に取り組んでもらうこともあるという。現在は陶芸にも取り組んでおり、小さく丸めた粘土の粒を積み上げて形を作っている。コップのような形だが、明確な用途はないらしい。

高西さん本人への取材は、質問に対して頷くか、首を振る形で答えてもらった。取材の間中、俯きがちで緊張した面持ちだったが、問いかけには全て応えてくれた。高西さんの回答、と呼ぶには質問が誘導的だったと反省しているが、その様子を文字に起こすと次のようになる。

+++

この作品（《無題》右図）はどんなイメージで作ったのですか？

楽しいイメージ？>首を振る

悲しい？>首を振る

面白い？>首を振る

自然の風景を描いたのですか？>頷く

山のイメージですか？>頷く

では、赤い部分はお花？>頷く

作品で気に入っている部分はありますか？>首を振る

作品はあまり気に入っていない？>頷く

陶芸の方が好きですか？>首を振る

貼り絵の方が好き？>頷く

端切れを切るのは好き？>頷く

糸を貼るのは好き？>頷く

切るよりも貼る方が好き？>頷く

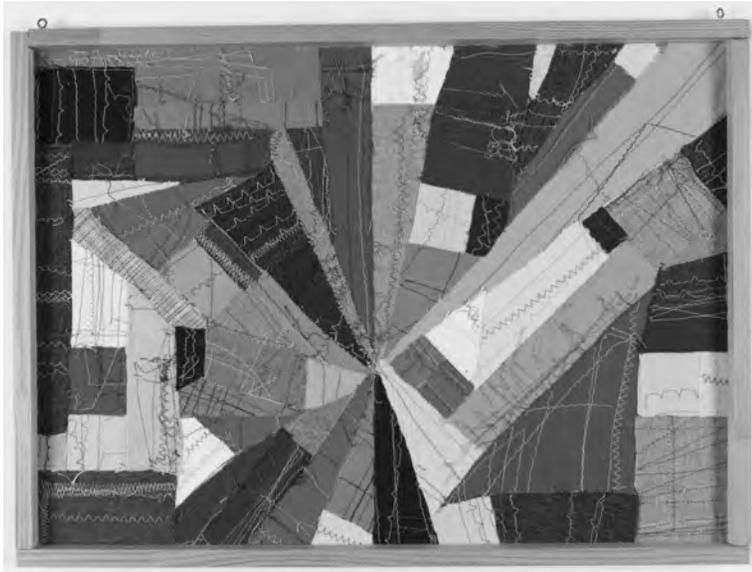
+++



高西勇《無題》2023



高西勇《オンドリ》2019



牧敦子《見て!! 見て!!》制作年不明

牧敦子

MAKI Atsuko

1980 年生まれ、長岡京市

所属 乙訓若竹苑

ミシンの針の動きを見つめ、布の端が近づくとくりと回し、続けて隣り合う辺に針を進める。針の動きだけでなく、糸の調子や布のテンション、ミシン全体の状態も確認しながら制作は進む。気持ちが高まると前のめりとなり、額がミシンにくっついている。

上糸と下糸に異なる色を選び、裏表は違った印象になる。さらに糸を途中で変えることもあり、その配色やタイミング、模様番号、縫うスピードも自身が選ぶ。厚みを持つほど幾重にも交差した糸も、ほつれや絡まりも、表現の一部としてそのまま活かされる。

牧さんは、中学校を卒業した後、和洋裁専門学校に通われていた。それが関係しているかは不明だが、今もミシンの操作は大好きなようだ。

一度ミシンのスイッチを入れると、制作は1時間以上続く。同じ布をずっと縫い続けるのではなく、時々ほかの布と入れ替える。作業場を区切るパーテーションには、そうした制作途中の布が掛けられている。それぞれが少しずつ手を加えられているので、いつ完成するのかは分からない。本人が職員に「見て、見て」と布を持ってくるので、完成かと思っていたら、後日さらに手を加えている時もある。

ミシンを止めて「かわいいかなあ」と声に出しながら、出来上がった「ぬいぬい」を眺める。

「ぬいぬい」とは「ミシン刺繍を施した一連の作品」のことであり、また「ミシンをかける行為」それ自体という、2つの意味を持つ単語だ。牧さんが通所する乙訓若竹苑の中で使われている。ミシンを使えば何でも「ぬいぬい」ではなく、牧さんが関わる場合のみ「ぬいぬい」になる。牧さんは手縫いの刺繍も手がけているが、こちらは「ぬいぬい」とは別扱いのようだ。

「ぬいぬい」は作品として公募展などに出品されるほか、施設内で作るバッグやくるみボタンなどの製品にも使用されている。バッグは全て同じ形に仕立てるのではなく、それぞれの「ぬいぬい」に合わせてデザインされる。そして、製品化に際して出た端切れを職員さんが縫い合わせたものが、パッチワークの「ぬいぬい」になる。

施設では「ぬいぬい」を作りっぱなしで終わるのではなく、さまざまな工夫がされており、製品化やパッチワークによる再構成は職員さんとの共作と呼べそうだ。

色鉛筆が、画用紙の上を赴くままに走っていく。鉛筆が色を誘っていくイメージやね、と郡山さんは語る。

学生の間は美術について専門的に学び、卒業後は大学で講師も務めた。現在は通所する施設にて、調理の仕事の傍ら制作を続けている。個人の制作としては木彫を手がけているが、ヴィレッジれんでは主に色鉛筆を使ったドローイングに取り組む。鉛筆は、絵筆などと違って、止まることなく描き続けられる点が気に入っているという。

郡山さんを紹介するテキストを書きかけて、彼の創作に対する感覚は、私の平坦な言葉より本人の言葉をそのまま引用した方が、よりよく伝わると思い直した。

以下は、取材に伺った際、自作を前にしながら彼が語った言葉を書き起こし、筆者が編集したものになる。言葉の印象を損なわないよう、なるべく話し口調を採用した。

+++

線がいくつか重なっていくことで見えてくるものがある。それを探しているということやね。ちょっと前にはなかったものが今は（絵の中に）出てきている。（今後は）形としてここに集約されて、見えてくるんじゃないかと。自分の中ではまだ見えてないんですね。それが徐々に…見えてくるんじゃないかというのが、今の新しい展開ですね。

手のラフさの中に、形を探しているんやけど、だんだん集約されるんじゃないかと、見えつつあるというのが現段階。やりながら、探っている中で、見えてくるものがあるんじゃないかと。

（制作を）続けていけば、自分の線も変わっていくし、（色も）青系にしたり、ピンク系にしたりもあるんですね。色を選ぶのは感覚的やし、昨日までとは違う自分がおるわけですね。その違う自分が、違う色を選んでるんですね。昨日と違う自分との出会いがあって、今までとは違う線が見えてくるんですよ。それが面白いんですね。

（最近の作品は）大胆なタッチがほしくなったんやな。エネルギーに満ち溢れていたかもしれませんね。自分の中で、大胆な自分も出したいなと思ったんですね。

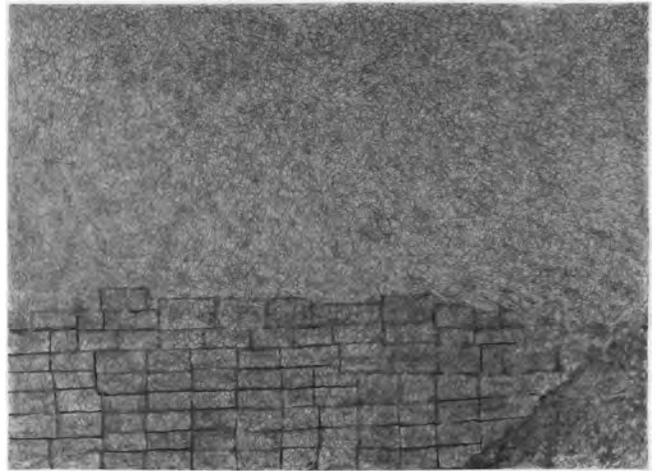
今までは落ち着き払すぎていたかもしれません。今回は急にアグレッシブになってきたという感じが、自分でもしているし、それが楽しみやなという感じがしているし。だからこう、自分でもタッチがあっちこっち、アグレッシブになってしまって、え？という感じ。喋ってもそういう感じがするでしょう。

僕のその、ラフな線が変わっていくのがわかるでしょう？自分でも変わっているなというのが楽しい。ラフな、だいぶんタッチが動いているでしょう。昨日とは違う自分があるなという感じがしている。円を中心にして、重なって、ラフな形が楽しい形になってきてるでしょう。色もちょっとラフで、賑やかになってきたという感じですね。

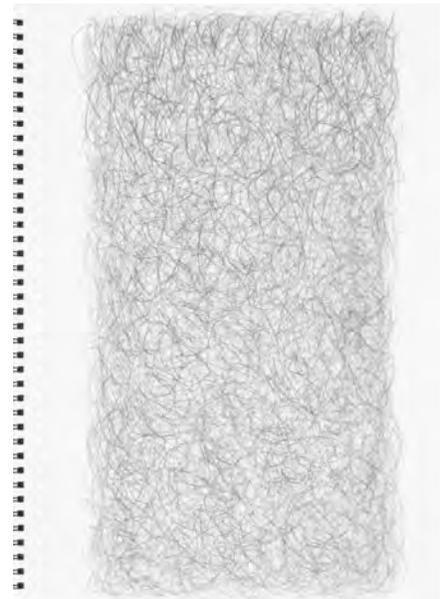
今日1日がすごく楽しいですよ。違う自分と出会えて。

（作品の印象は）タッチによって違うし、色によって違うし、それが楽しいから、絵を描くのはやめられない。

+++



郡山ヒロアキ《瓦礫の跡》2023



郡山ヒロアキ《スケッチブック》制作年不明

郡山広明

（作家名：郡山ヒロアキ）

KORIYAMA Hiroaki

1957 年生まれ、亀岡市在住

所属 ヴィレッジれん